編集長退任の弁

多摩美術大学
石田 晴久

「会誌を面白くするために，大幅な権限を与えるから，編集長をやって欲しい」という話が，当時の戸田巌会長からあったのは，1997年の初秋だったと記憶しています．早いもので，それからもう4年余りになりましたので，マンネリ化を避けるため，この3月号限りで編集長を退任することにしました．後任は，私にとっては先輩であり，当学会の名誉会員でもある和田英一氏（東大名誉教授，富士通研究所）です．

さて，私が編集長になってまずやったのは，本誌の物理的な形状を，1998年1月号からですが，B5からA4に変えたことです．これで，会誌は，見た目にも確実に「変わった」わけです．4月号からは，内容構成も変え，bit誌などの商業誌を参考にして，実用的な解説やコラムなどの連載記事を多くして，読みやすい雑誌になるように心がけました（このことは，bit誌が2001年4月号を最後に休刊となる原因の1つだったと，あとでいわれましたが，事実とすれば，申し訳ないことです．このことは，会誌2001年4月号に「bitの休刊を惜しむ」と題して，記録しておきました）．

次に試みたのは，誌面のデザインを大胆に行い，しかも年中変えることでした．これはACMの編集長ダイアン・クローフォード女史の流儀に習ったものです．当初はコラム担当のジャーナリスト宍戸周夫氏にもご意見をうかがい，編集担当の後路さんや湯本さんに工夫してもらいました．彼女たちから，ゲラを私および著者や閲読者に送ってもらうのには，FAXではなく，メールの添付ファイルにし，ファイル形式としてはPDF（Portable Document Format）を採用しました．このPDFは今ではすっかり業界標準になっています．これで，通信の効率は大幅に上がりましたが，実は，心理的にいえば，PDF形式だと一見きれいな形になりますので，内容を書き直すのが躊躇されてしまうという欠点もあります．それから，ACMやIEEE Computer誌などの記事の翻訳紹介にも気を配ることにし，翻訳は安藤進氏にお願いすることにしました．同氏には，今も翻訳に協力してもらっています．

一方，著者からの原稿については，最初は，編集側で大幅に書き直すことあるべし，と予告しましたが，私には結局それはあまりできませんでした．仕事が結構あって隠居ができず，時間がとれなくて，手抜きをしてしまったからです．このあたりは，2001年12月号で，後路さんが「編集長からのメールはいつも短い」と書かれた通りです．おかげで，著者に怒鳴り込まれたり，詫びにいったりということはなくてすみました．

記事の企画やとりまとめには，編集委員のほか，必要に応じて外部の方を「ゲストエディタ」として，委嘱し，閲読や原稿の修正などの編集をお願いしました．これで思い出すのは，1999年3月号で予定していた特集が間に合わなくなり，急遽，東大の坂村健氏に「TRONプロジェクトの15年」という特集を組んでもらったことです．これで穴が開かずに済みました．実は，編集作業はいつも綱渡りです．編集担当者の胃を悪くさせないためにも，著者の方々には締め切り日を守ってもらいたいものです．

連載記事の中でアイディアものだったのは，塚本享治氏（東京工科大，もと電総研）企画のインタラクティブ・エッセイです．これのまとめは大変だったようです．塚本さんに，ベストエディタ賞が贈られたのは当然でしょう．この賞は，コラム「乱世のアクセス・ネットワーク」および「ブロードバンド時代と通信料金」の三橋昭和氏にも差し上げられたのもよかったと思います．記事の中身としては，振り返ってみると，インターネットやパソコン関係が多かったようです．これらは，私の大きな関心事でもあったためですが，時代の流れでもあったような気がします．

最後に会誌の編集について特に述べておきたいのは，会誌は，編集委員や学会の編集担当者だけではなくて，大勢の作業グループの人たちにも支えられているということです．具体的には，A（応用），B（書評，会議レポート），C（通信，インターネット），F（基礎），H（ハードウェア），P（事例，ビジネス），S（ソフトウェア）の各グループで，それぞれ10人以上，合計で100名以上の会員の皆さんが，無償で，特集を組んだり，単発記事を企画してくれたりしています．また，柳川事務局長の理解のもとに，後路，湯本，鈴木（途中まで），綿谷（途中から）の編集担当者には，原稿の催促から，レイアウトや編集まで，献身的に仕事を進めていただきました．私としては，この4年間を何とかボランティア編集長として務め上げられたことに対し，著者および上記の関係者の方々に対し，心から感謝申し上げる次第です．